
 学 会 記 事

第175回例会新潟循環器談話会総会

日 時 昭和63年 7月 2日 (土)
 会 場 新潟大学有壬記念館

一 般 演 題

1) 当科で経験した TGA 症例の検討

佐藤 勇・大久保総一郎 (新潟大学小児科)
 桜井 守
 塚野 真也 (国立療養所新潟
 病院小児科)

過去4年間に当科に入院した TGA 9例について検討した。内訳はI型4例, II型4例, III型1例であった。I型は入院時日齢, 心カテ時日齢とも若い傾向にあった。入院時 PaO₂ は平均 25.9±9mmHg であった。5例に Prostaglandin E₁ の投与を行い有効であった。7例に Balloon atrioseptostomy を施行し, PaO₂ は平均 41.8±7.9mmHg と有意に上昇した。入院時に PaO₂ が 41.7mmHg と比較的高値で, 造影上太い動脈管開存を認めた例では, PGE₁ を使用せず経過観察していたところ, 低酸素血症の増悪, 左室圧の低下を認め PDA の閉塞がみられた。本例の経験から, 新生児期に PDA があり, PaO₂ の良好な症例でも, 充分な BAS のもとに PGE₁ の使用が必要と考えられた。また新生児期のアンギオによる左室拡張末期容積は, 平均222±77% of Normal で左室駆出率は0.60±0.06と良好で, 新生児期の Jatene 手術の可能性を示唆する所見と考えられた。

2) Successful PTCA 5日後に, prolonged spasm によると思われる急性冠閉塞をきたした1例

三井田 努・小田 弘隆 (新潟市民病院)
 佐藤 広則・樋熊 紀雄 (循環器内科)

PTCA 成功後5日目に急性冠閉塞をきたした症例を経験した。症例は52才の男性, 午前の労作及び安静時胸痛を主訴として入院, 冠動脈造影により左前下行枝近位部に99%狭窄を認めた。薬物治療によっても胸痛がとれないため, PTCA を施行し99%狭窄を冠動脈解離なく50%以下に拡大し成功した。術後5日目に行った運動負荷試験では負荷陰性であったが, 運動負荷30分後より胸痛

が出現した。ECG 上 I, aV_L, V₁~5 で ST 上昇を認め, NTG, ISDN が無効であったため緊急冠動脈造影を行った。PTCA 施行部は完全閉塞で, NTG-IC, UK-IC とも無効で PTCA により再開通を得た。PTCA 成功24時間以降の急性冠閉塞は極めて希とされ, 術後早期の狭心症の再発にはスパズムの関与が報告されている。本例では術前より安静時狭心症があり, 労作時胸痛も午前に限られており, 急性冠閉塞にスパズムの関与が強く疑われた。

3) 自然弁感染性心内膜炎の外科治療の動向

上野 光夫・相馬 孝博
 小菅 敏夫・林 純一 (新潟大学第二外科)
 山崎 芳彦・江口 昭治

昭和55年~63年の9年間に15例の自然弁感染性心内膜炎(NVE)の手術を経験した。活動期2例, 治癒期13例であった。男11例, 女4例であり平均年齢は49歳であった。罹患弁別ではA弁8例, M弁4例, A+M弁3例であった。大動脈弁周囲膿瘍は5例で全体の1/3を占め, 近年増加している。進行する心不全, 疣贅などによる塞栓症の危険性の高い場合には緊急手術をも考慮する必要があり, また抗生剤治療によっても感染を制限できない場合は手術的治療を考慮するのが一般的な考え方となっている。

弁輪部膿瘍の疑われるような症例では, 長期間の抗生剤治療の膿瘍の拡大, 弁輪周囲組織の破壊, 脆弱化をもたらす手術的治療を困難にする可能性もあり, 救命のため早期手術が適切とされる症例も存在している。最近, 大動脈弁輪部膿瘍症例が増加しており, 通常の AVR では対処できず, 各々の症例に対し適切な術式の選択および工夫が必要となってきている。

特 別 講 演

1) Interventional Catheterization

—先天性心疾患から川崎病まで—

久留米大学医学部小児科教授

加藤 裕 久

先天性心疾患に関する最近の進歩には目覚ましいものがある。なかでも心臓カテーテル法は, 治療面で重要な位置を占めるようになった。圧較差 40mmHg 以上の肺動脈弁性狭窄例にたいして Balloon valvuloplasty を施行した。圧較差の推定は Doppler 法で十分可能であった。術後の PR が見られることが多いが, 長期的